

## 里山 - 文化としての自然

国際シンポジウム「里山 - 文化としての自然」は、龍谷大学：里山学・地域共生学 ORC (Open Research Center) が主催して、日韓を中心としたアジアの里山的自然を比較し、里山を維持させてきたそれぞれの地域文化を解明することによって、現代の文明生活を顧み、今後の人間社会と自然との共生の可能性に関するヒントを得ることを目的とします。

里山学・地域共生学 ORC は、2004 年以来、「里山をめぐる人間と自然の共生に関する総合研究 - 生態系保全と環境教育のための里山モデルの構築」をテーマとして、研究を重ねてきました。本国際シンポジウムでは、これまでの成果を公開するとともに、今後のさらなる展開に結びつけるべく、「里山 - 文化としての自然」と題して、韓国より 2 名、国内より 1 名のゲストをパネリストとして招聘し、それぞれの地域の文化と里山的自然との相関関係について討議します。

「里山」とは、水田稲作を中心的生業とする場所であり居住空間である「里」と、肥料・薪炭等の供給地である「山」（隣接森林）とが複合する農業環境・農業景観です。「人の手が入った自然」である里山は、戦後のエネルギー革命と農業改革によって放置され、現在、日本の絶滅危惧種の 5 割が生息する場所と見られています。人の手が入ることで結果的にむしろ高度の生物多様性を維持してきた、ということは、自然と人為、自然と文化という二項対立図式を自明とする西洋近代の視座からは理解しがたいことであって、里山こそはそうした二項対立図式を乗り越える「文化としての自然」です。類似のことは、韓国をはじめアジアに見られるでしょう。こうした「文化としての自然」の国際比較を通して、生物多様性の維持機構のみならず、持続可能社会へのヒントをローカルに徹する視座から獲得することが、グローバルな環境問題解決への一つの大きな貢献になることを日韓の対話によって明らかにしたいと思います。

丸山 徳次

(里山学・地域共生学 ORC 副センター長)